

近未来小説

プラントビジネス

華山勉

亜紀書房

著者紹介

華山 勉 (はなやま つとむ)
1943年山形県に生まれる。
重化学工業関係の取材歴20年、
並行して国際経済についての
評論活動をしている。

1986年5月1日 第1版第1刷発行

定価 1300円

近未来小説 プラントビジネス

著 者 華 山 勉

発行人 株式会社 亜紀書房

東京都千代田区神田神保町2-9

電話 03-264-8301 (代)

振替 東京 0-144037

乱丁本、落丁本ははおとりかえいたします。

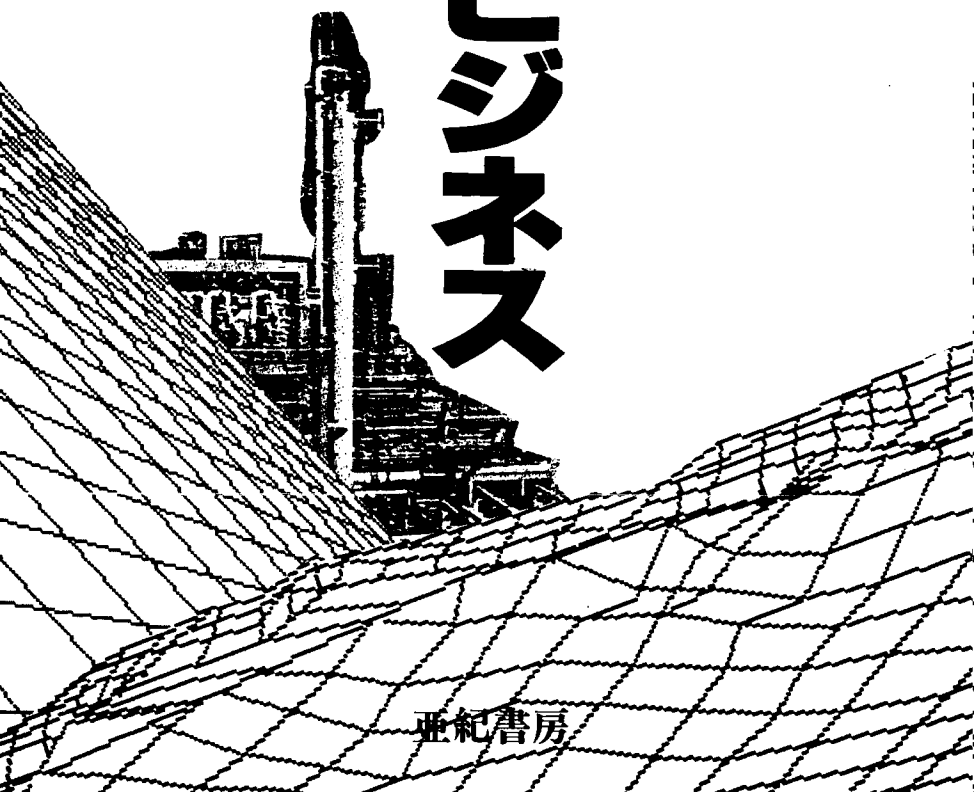
K & S印刷・大洋社製本㊞40

0034-1217-0098

近未来小説

プラントビジネス

華山 勉



亜紀書房

目次

I	残された机上のメモ	7
II	メキシコ・シテイ	25
III	老人と青年	41
IV	老人たちの密談	57
V	友との再会	69
VI	隠然たる実力者	87
VII	郊外の研究室	101
VIII	気難しい人物	115
IX	債務不履行宣言	127

XX	XXIX	XVIII	XVII	XVI	XV	XIV	XIII	XII	XI	X
覇者不在の耐久レース	闇に映える虚構のシャトー	アメリカの逆襲	会長の茅屋	メキシコからの賓客	炎上する油田	情報操作	コアトリクエの女神	激論のすえに	机上の大構想	灯のない屋敷
.....										
323	305	291	279	257	239	221	203	179	165	149

近未来小説

フロントビジネス

I 残された机上のメモ

いつもだったら陰鬱な梅雨の季節だというのに今年は空梅雨に終わりそうな気配だった。木内信夫は読み掛けの朝刊を食卓の上にはおり出し、朝のテレビニュースの画面に視線を移した。アナウンサーは、今年は渇水の恐れがあり、大都市では水不足が深刻化している、と生真面目な調子で原稿を読み上げているところだった。

「今日も一日熱い日となりそうだ」

木内は一人つぶやき、冷めかけた渋目のコーヒを一気に飲み干した。ワンルームマンションで一人暮らしを始めてから早くも、三年近くになる。ようやく千葉の近郊に土地付き住宅を確保したのだが、商売がら夜が遅いでの車代も馬鹿にならない。それに五歳になる長男の陽は虚弱体質ときている。金曜には必ず帰宅することを、唯一の条件として、別居生活を最初にいいだしたのは、妻の早知子だった。

木内が住むこのマンションは高層ビルがそびえ立つ西新宿からはそう遠くない位置にあった。木内が勤める関西商事まで地下鉄・丸の内線を利用すれば、三十分程度の距離である。

通勤には便利だ。木内は手帳を広げ、今日のスケジュールを確認すると勢いよくドアを閉め、マ

ンションのエレベータ・ホールに向かって歩き出した。朝の日差しがホールに射し込んでいる。大きく息を吸い込んでエレベータに乗った。

木内は関西商事鋼管輸出部の中南米課長である。中堅幹部の一人だった。出社は早い。それが入社以来の習慣となっていた。木内が自分の席についたとき、時刻は八時半を少しまわったばかりだ。引き締まった表情はいつもと変わらない。社内はまだひっそりとして人影はすくなかった。木内の机には、同じ課の加納元子が残した一通のメモがあった。繊細な字で、

日管製鉄の角田様まで連絡をして下さい。至急相談したいことがあるとのことでした——加納。

受発注をすべてコンピュータで管理している日管製鉄にしては、担当者がわざわざ電話で連絡してくることは珍しいことだ。ともかく、急ぎの用件であるらしい。幾分、早過ぎはしないかと思っただが、木内は素速くダイヤルボタンを押し、角田を呼び出した。意外にも角田は出社していた。

「関西商事の今田です。いつもお世話になっておりまして、電話を頂いたそうですが……留守にしておりますて申し訳ありませんでした」

日管製鉄の角田とは、木内が鋼管輸出部に配属されて以降の付き合いだからすでに五、六年になる。が、そこはメーカーと商社の間柄だけに、互いに親しいとはいっても限度がある。木内の口のきき方はあくまで丁重だ。電話口の向こうから角田の間延びた声が戻ってきた。

「実はメキシコ向けに鋼管輸出の話が突然舞い込んできましたね、この話はうちの上の方から出ている話でして、私としても十分な情報を持っていないのですよ。日管製鉄としてはお宅を通じて相手と交渉したい、そんなふうに考えているのですが、どうでしょう」

「有難うございます。それは結構ですが、今どきメキシコとは珍しいですね。客先はどちらで……それに用途はどんな分野でしょうか」

「いや、実をいうとそのあたりがはっきりしていません。木内さんはパテックというメキシコの会社をご存知ですか、後程ファックスで概要は送りますが、そこがカウンタートパートになります。とりあえずお宅の方にはファイナンスの問題を含めて検討を頂きたい。それからこの話はできるだけ内密な形で進めてもらいたいのですが、その点を配慮して下さい。急いでいる訳ではないが、宜しく検討をお願いします」

そういつて、角田の電話は切れた。相手の会社はパテック社と叫びつた。木内には聞き覚えのない会社である。それはそれとして角田の話では、かなり大きな契約規模となりそうだ。対象はシームレスパイプで、メキシコ向け商談としては最近にはない予想以上の大型案件だった。

五十万トンものパイプを継続して買付けたいというのだ。これほど大量のパイプをオッハーしてやることはかつてないことである。電話を終えた木内の表情は興奮に包まれていた。が、いかにも莫然とした話でもある。それに問題の多いメキシコのことである。

話は内密に進めて欲しいといった、角田のなにかいわけありげなものもいい方も、引っ掛かる。なんだか日管製鉄はリスクを関西商事におしつけ、逃げを打っているような気がしないでもない。どういふことか、木内の頭のなかには幾つかの疑問がわきあがった。

木内の場合、考えることよりもまず、行動が先になるタイプの男である。突かれたように受話器を取り上げた。どうやらこの話には石油か、エネルギー問題が絡んでいそうだ。今田に聞くのが一番早いかも知れない。木内はとっさに、そう判断して今田と話をしてみる気になった。

「今田課長はいますか。鋼管輸出部の木内です」

今田とは大学が同窓で、同期入社ということもあって、木内は今田を気の許せるやつだ、と思っていた。二人は家族ぐるみの付き合いをしていた。今田は席にいた。

「木内か、いやに早いじゃないか、そのうちやろうとは思っていたんだ」

今田総吉はエネルギー機械本部の中堅課長だった。担当しているのは石油関連機器だったが、担当分野だけでなく、エネルギー問題全般に関して、社内でも有数の情報通として知られていた。入社二十年。今がまさしく働き盛りというところであらう。この分野では着実に実績を上げ、同期のなかではめきめきと、頭角をあらわしている男だった。

「ちよつと、教えて貰いたいことがあるんだが、少し時間をくれないか」

「難しい話か。十時からミイティングが始まるところなので、三十分位だったら大丈夫だ。そうだなあ地下の喫茶店、ロースタで会うことにするか」

木内が今田との電話を終えたとき、覚えのある香水の香りが漂ってきた。ふとみると、木内の席の並びの端に、加納元子が席につこうとしていた。元子は女子大を出て、関西商事に入社してからちょうど二年目になっていた。会社があつらえたこん色の制服の胸元には、刺繍で淵どりされたブラウスのがぞいていた。木内と視線があうと、新聞を整理する手を休めて、僅かに微笑みかけた。「おはよう加納君。エネルギー機器部の今田課長と下のロータスで会ってくるので、何かあったら連絡をくれないか」

木内はそういい残すと、急ぎ足で部屋を出ていった。運ばれたコーヒーを飲みかけたとき、今田の姿が現れた。今田は喫茶店のなかをひとまわり見渡してから、木内の姿に気がついて近寄ってきた。木田は先程、日管製鉄からファックスで送られたメモを、背広の内ポケットから引き出し、今田に合図を送った。

「もう間もなく七月か、今年は空梅雨に終わりそうだ。暑くてかなわん」

二人は東京本社に勤めているとはいっても、そうたびたび会っているわけではない。今田は懐かしげに声をかけ、木内の前の席に腰をおろした。今田はコーヒーを注文した。木内は頷きながら、手にしているメモを今田に渡した。今田はひと通りメモに目を通してからいった。

「メキシコ向けに鋼管輸出か、かなりの量だね。これほど大量のパイプを必要とするプロジェクトは石油開発以外には考えられないが、メキシコに新しい油田が発見されたとは、聞いていないがね」

「そうなんだが、これをみたまえ」

木内は今田が持っているメモを手許に引き寄せ、そういった。木内が示したメモには、石油掘削用のケーシングパイプや明らかに石油輸送用と思われる大口径の鋼管も含まれている。この仕様でみるかぎりでは、やはり用途は石油開発以外には考えられない。

「奇妙だね。だいたい、あそこは米系メジャーさえも愛想をつかし、引き揚げていることは君も知っているだろう。石油が天然ガスかは知らないが、石油埋蔵に関していえば、評価は低いはずだが……」

実際、今田のいう通りだった。確かにメキシコは一時、石油ブームに沸いたこともある。サウジアラビア並みの石油埋蔵があるのではないかと騒がれたこともあった。が、米系メジャーなどが、内陸部やメキシコ沿岸などいたるところを掘り返したが、せいぜいが中小規模の油田を発見したのにとどまり、過大な期待は打ち破られた。それにナシヨナリズムの台頭で、急激に開発条件は悪化し、一時のブームも嘘のように沈静していた。その辺の事情はさすがに木内も知っていた。

「だが、石油プロジェクトでないとすれば、いったいこれほど大量のパイプを何に使おうというだろう。奇妙な話ではないか」

今田は忙しく頭を回転させていた。もういちど、ファックスのメモを丹念に読み返しながら、幾度も頭を振った。しばらく間をおいて、改まった口調でいった。

「それにしても話が大きいではないか。一応調べてみる価値はあるんじゃないかね。俺の方でも調査してみるが、もしかしたらとんでもないビッグ・プロジェクトに発展することも考えられる。石油の話だとしたら桁外れにおもしろい仕事になるような気がする」

そのいい方を聞いて、木内はいかにも今田らしいと思った。大抵こういった話の場合、普通は悲観材料を並べたて、慎重にやるべきだというのがこの商社の社風というものだ。とくに十五年ほど前のことになるが、グランドマン航空機事件が発覚したのを契機に社内の勢力地図が大きく変わり、総務畑出身の山田新造が社長に就任してからというものは、その傾向が一段と強まったのではないかと、木内には思える。

ところが今田はそういう社内の動向には無頓着のようだった。いつぞや中東に天然ガスを利用した連鑄プラントを建設する話が舞い込んできたときも、社内の慎重論を抑え込んで、見事にプロジェクトをまとめあげたこともある。強気を信条とする男だった。今のところ今田のこの強気の路線は、成功をおさめていた。

二人の話が一段落したとき、喫茶店は朝食を抜いて出勤した若い社員たちで混雑し出した。すでに十時だった。そろそろ会議が始まる時刻になっていた。時計を覗きこんだ今田は、「この件はまた後で相談しようか」、そういうなり伝票を攜んで立ち上がった。

午前の会議を終えて席に戻った今田総吉は、ロータスで木内信夫から聞かされた話が妙に気になって仕方がなかった。あのメモにあった発注仕様からみる限りでは、明らかに石油か天然ガスか、エネルギー関連資材以外に考えられない、今田にはそのように思えた。

入社以来、機械部門のなかにあつてエネルギー機器を一貫して、担当してきた経験からいっても、ことエネルギー問題に関しては相当な自信があつた。実際社内だけでなく、世間的にもエネルギー問題では関西商事に今田ありと、高い評価を受けていた。

が、今田が知る限り、メキシコでこれだけ大量に石油開発資材を必要とするプロジェクトは存在しないはずだ。それは自信を持っていた。だいたい、メキシコでの石油開発はメジャーさへも放棄したはずだった。だから地下の喫茶店では木内に対し、もうひとつ積極的にはなれず、中途半端ない方しかできなかったのもそのためである。

今田はあのとこのことを鮮明に思い起こすことができる。五、六年前だったか、日本も石油開発公社が中心となり、ナショナル・プロジェクトとしてメキシコでの石油開発に取り組むため、大掛りな国策会社が設立されたものだった。一種のブームに乗った計画だった。

が、提携していた米系メジャー、エプソンズ社が突然、撤退を声明した。撤退理由はいとも簡単なもので、つまりメキシコの資源政策があまりにも外資にとって条件が厳しくなったので、これ以上、投資を継続することは困難であるとして、各パートナーに撤退に協力をしてくれないかと、突然いい出したのだ。

この計画にはかなりの資金を投入していたので、日本の各関係企業間で撤退をめぐるのは激しい議論を呼んだ。関西商事では、社長の山田新造がコンソーシアムの代表委員として出席していたが、特別、発言も求めず、あっさりとして撤退に同意して帰った。

今田はそのとき、米系メジャーの撤退の仕方に何か不自然なものを感じていたのだが、発言する立場にもないし、その機会を与えられるはずもなかったのだ、結局のところ沈黙を守らざるを得なかった。

エプソンスが撤退を決めたのに続いて、メキシコに進出していた各コンソーシアムの撤退が相次いだ。その結果、メキシコでの石油開発は火が消えたような状態となった。これは、今田にとって間接的な係わりだったとはいえ、これは苦い経験だった。今田はそのときのことを思い出し、軽く舌打ちをして、手にしたボールペンを机の上にほおり投げた。

昼食の時間が迫って、社内はざわついていった。時計を覗くと、十二時を少し廻ったところだった。前の席に坐る長谷川が今田を昼食にでも誘いたいような素振りをみせたが、今田の表情があまりにも硬かったので、他の同僚を誘いそそくさと出ていった。

今田がこの話を奇妙だと思ふのは、日管製鉄がこれを持ち込んできたということだった。日管製鉄ともあろうメジャーな企業が、なんの根拠もなく動き出すはずはない。しかも、木内が聞いた話では、日管製鉄のかなり上の方が動いているということではないか。おもしろそうな話である。

そう考えると、今田は妙な興奮にかられるのを覚えた。次第に気分が高揚してくるのが自分でも解る。木内を昼食に誘うことを思い立ち電話を入れてみたが、木内はあいにく留守のようだった。電話に出たのは加納元子だった。木内が席に戻るの午後になるのではないかと、快活な声が返ってきた。

「なかなか美形だね、彼女。飲み連れ出すわけにはいかないか」

「馬鹿をいえ、あの娘はそういうんじゃないんだ」

だいぶ前のこと、今田は冗談のつもりだった。ところが木内は真剣な表情でそういった。そんなやりとりがあったことが、強い印象として残っていた。今田はあのときのことを思い出し思わず苦笑した。木内がいらないのでは仕方がない。受話器を置いた今田は端正な顔を歪めるように、しばし考え込む風情を作った。

「副社長の大園ならば何か情報を持っているかも知れない」

みると、副社長が在席していることを示すランプがついていた。今田は大園副社長に会ってみるつもりになった。そう思い立った途端に、今田は机をバチンと叩き席を立てていた。

関西商事の副社長室は機械本部が占める五階の奥まったところにあった。今田の席とは同じフロアだった。今田は急ぎ足で副社長室に向かった。昼休みの時間のためか、部屋の入口には秘書の姿はなかった。

今田は軽く大園の部屋をノックしたが、返事がない。今田はかまわずドアを押し開いた。ちょうど、大園はドアを背にして盛んにコンピュータのキイを叩いているところだった。人の気配を感じた様子だが、キイを叩く手は少しも速度は落ちなかった。大園はその姿勢を崩さずにいった。

「それは鋼管輸出部に舞込んだ話だな。日管製鉄はどうやら前面にでることは避ける方針のようだが、五〇万トンものパイプ商談にしては課長レベルで対応しようとしている。何か臭う感じだが、今田の判断はどうだ」

大園はそういういい終えるとクルリと回転椅子を正面に向けた。要件も確かめもせずに、いきなりそういった。今田は、一瞬息を呑んだ。木内からこの話を聞いたのはつい今しがたのことだ。一体どこで情報を仕入れたというのか。

大園はそういうやり方で人の意表をついて楽しむところがあることは十分知っているつもりだったが、まさしく意表を突かれた恰好になった。大園はいたって上機嫌の様子だ。

ビンに少し白いものが混じっているとはいっても、大園の顔立ちは精悍そのものだ。ニューヨーク駐在が長く、これまで主として機械畑を歩いてきた。四十三歳にして取締役、四十八にして副社長のポストを獲得した男である。この関西商事の創設者である三島家とは遠い遠戚関係にあるとも